

ひ」の抒情へと向かう。すなわち、8・9と10・11の二つの対句によって作歌主体の「思ひ」のみが一首の主旨としてつながれていくのである。すでに妹を幻視することを意図しないのは、「我が漕ぎ来れば」という意志の表現が条件句として形成されていないためであった。この行旅長歌において、意志の表現力と妹への表象を失ったかわりに、作歌主体が強く表現にあらわれ、叙述の表現力が優位になったのである。このような祝賀表現を構造的に失った行旅歌については、新たに表現の史的位相を図らねばならない。

注① 拙稿「家持の防人関係長歌——その方法と表現構造——」（和田繁二郎博士古稀記念『日本文学 伝統と近代』和泉書店 昭58）所収。

② 村田正博「人麻呂の作歌精神——「吾等」の用字をめぐって——」（『萬葉』第90号 昭50・12）参照。

③ 「畿内制の成立」（『古代の日本5』 角川書店 昭45）所収。

④ 「鶏が鳴く あづま」（『万葉集東歌研究』 桜楓社 昭47）所収。

⑤ 3 「山背の管木原」は現在の綴喜郡であるが、奈良から下つ道を上すれば第一の駅家山本のあたり。そこから泉川を渡ると井手で中つ道の延長と行き合ひ、東山道と北陸道の岐路になる。この泉川の右岸か左岸かは決定できない。5 「瀧屋の阿後尼の原」については『宇治市史1』が「おそらく菟道地区から五ヶ庄岡屋方面にかけての宇治川沿いの平野で、俗に「菟道野」または「蜻蛉野」と呼ばれているあたり」と推定する。また同書は「石田の森」に鎮まる社「天穂日命神社」について「現在地に社が移る以前は、木幡山越えの地に祀られていた」とする。「阿後尼の原」は木幡山から逢坂山へと越え行く手前の野であろう。

書評

中西健治 著

『浜松中納言物語の研究』

伴 利 昭

『浜松中納言物語』は『狭衣物語』や『寝覚物語』等とともに王朝末期を代表する作品であるが、『源氏物語』の影響を強く受けているために、『源氏』を粉本としたまがいのもの、『源氏』まがいの『源氏』に劣る作品という低い評価を与えられ、本格的研究の行われぬまま長い時を経て来た。しかし、最近はこちらら作品に源氏的世界とは異なる新しい魅力を見出し、王朝文学の終末ではなく、新しい文学の創造として位置づけようとする動きが活発化してきている。松尾聰氏の『平安時代物語の研究』をうけて、従来あまりかえりみられなかった分野に開拓の鍬が入れられた。鈴木弘道氏の『平安末期物語についての研究』及び同書の増補版などを中心に、王朝末期から中世にかけての基礎的研究が一段と盛んになった。近年のもの二、三を拾ってみても『有明の別の研究』『あさちが露の研究』（大槻修氏）、『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（小木喬氏）、『物語文学の研究—本文と論考—』（金子武雄氏、本文編夜寝覚物語、我身にたどる姫君、恋路ゆか

『浜松中納言物語の研究』

この二つの野がうたわれたのは旅の宿りの場所として、それぞれの位置が確かめられる。行旅歌において旅寝の野をうたう例として「安騎の大野に……旅宿りせす」（四五番歌）、「越智の大野の朝露に……旅寝するかも」（一九四番歌）の例がある。旅寝だけの上地点を省いたのはこの主題のちがいに求められよう。HやCがこの二地点を越えるべき地名のみを列挙したのであり、本稿もここを課題とする。行旅歌の旅寝の主題については稿を改めたい。

⑥ Cの3と4の終りはそれぞれ「棹さし渡り」「見つつ渡りて」とあり、3が舟渡りであることは明らかである。しかし4は橋を通るとも舟で渡るともとれる。またBが泉川をうたわれないのは不審である。この場合は橋を通行するのが慣例化していたために表現されていないのかも知れない。橋の設置は歌の成立年代の決定に結びつくが、最近榮原永遠男氏の論がある。泉大橋は天平十二年ごろに、宇治橋は大化二年の造橋碑断片があるものの、統日本紀に別伝があり造橋年代も決定できないとする「古道—飛鳥から近江へ」（季刊『明日香風』9号）所収。

⑦ 拙稿「万葉五・六番歌考——表現主体と歌の様式——」（『古代文学』二十三号 武蔵野書店 昭59・3）所収。

⑧ 高取正男「畿内の境域神」（『日本の古代』月報1 角川書店 昭45）所収。

⑨ ⑦に同じ

⑩ 注①に同じ

しき大将、さくら川物語)等、地道な研究の成果の蓄積に注目されるのである。『浜松中納言物語』についても、小松茂美氏によって『校本浜松中納言物語』が刊行され、研究論文も次第に数が増えてきている。しかし、一書としてまとめられた研究書はまだなかった。したがって、中西健治氏の『浜松中納言物語の研究』は最初の研究書という榮譽を荷ったわけであるし、注目される所でもある。

同書の構成は次のようになっている。

- 第一編 構想に関する論考
- 第二編 語彙・語句に関する論考
- 第三編 典拠・享受・研究史に関する論考
- 第四編 浜松中納言物語登場人物総覧
- 付録

第一編は四つの章からなり、登場人物の設定を作者の構想意識とかかわらせて考察したものである。第二編は第一章「主題に関連する語彙・語句」として三つのことばを、第二章「特有な語彙・語句」として三つのことばを、それぞれ考証されている。第三編は典拠に関するもの一、享受に関するもの一、研究史に関するもの三、の五つの論考からなっている。第四編は物語に登場する人物すべてを取りあげ、物語中の呼称、係累を記し、その人物の行動や心理について略記し、それに該当する巻数と頁数を示したもので、物語理解の利便と手引になるものである。付録には『寝覚物語』、『とりかへばや物語』に関する論考六編が収められてい

る。この中には、寢覚物語作者非孝標女論など、注目される論考が含まれているのであるが、鈴木弘道氏の論評が付載されていることでもあり、ここでは言及しないでおく。第一編から第三編までが、この書の中核をなすと考えられるので、これにつき触れておきたい。

第一編は四人の人物の設定と構想との関わりを論じたものであるが、その論証の方法は叙述せられた文章、あるいは語句を吟味し、これを一つの手がかりとして構想意識をうかがうという特徴的な手法である。たとえば、第二章唐后の人物設定では巻一と巻三の唐后についての類似の記述を検討するところから出発する。

この部分は、繰り返しの文章で面白くないという見方をされてきたところでもある。中西氏は両者を詳細に比較して、まず「本体は」「親王」「子孫」などの表現に注目し、その用法を検証することによって、作者の意図した用語選択であることを指摘する。更に、「本体は」なることは、人物の系譜を語る時の型であって、他の説話を叙述する場合は異なっているという。このことに注意して二つの文章を検討し、「作者にとって、登場人物とくに新しい着想に基づく人物を具体化させる際、その系譜、過去の出来事などに遡って説く方法」であるとされる。ことばの検証から作者の意識まで探ろうというのは、面白い観点であり、細かな検討も説得力がある。ただ、「新しい人物を具体化させる」ためになぜ系譜叙述を繰り返すという方法を作者はとったのだろうかという疑問が残る。この点についての中西氏の見解が知りたいとい

ろである。また、この章の目的である「もともと中心的な人物である唐后を作者はどのように設定しようとしているのかという問題」について、主として「異郷の貴種を印象づけるためにことさら見なれぬ語を用いるという意識」という指摘にとどまっているところは、少し物足りない。とりあげた材料からいえることの範囲におさまられたからであろうか。論者の思量が過ぎて、作者の意識を根拠なくつくり上げることが敵につしまなければならぬが、構想とのかかわりは、表現されたことばの検証だけではおさえきれないところがある。別の観点からも、唐后設定の意義を追求し、補ってほしいと希望する。

第二編は語彙・語句の考証であるが、主題、構想へもことばを手掛りとして論及せられた第一章に特色がある。「身をかふ」の場合、物語中の全一八例を提示、解説して、その用法を検討し、二種の別のあることを指摘され、A たんに転生を意味する用例……10例、B 転生に恋しい人に逢う手段としての意味が付与されている用例……8例 とされた。また、A は多く完了表現を伴い、既に完結した転生を表現する、B は未来形またはそれに準じた表現を伴い、転生を契機とする将来への願望を表現することも規定し、さらに、B は和歌的発想による一種の慣用句的表現に由来することを、三代集の用例を検証して論じられた。これらの論は豊富な例をあげて丁寧に考証し帰納された結論で、首肯されるべきであろう。たしかに「身をかふ」を多用する『浜松中納言物語』は転生の思想を大きな基盤として持っていることは、よく了

解できるのである。ただ、その具体的なあらわれとして「親子の契り」を考え、「浜松は『親子の契り』を源氏物語から得ながら、それを主潮の一つとして展開していった物語であると考えられるのではなからうか」とされるところは論理が不足するよう気になる。両物語にみられる親子の契りの相関と浜松における展開の真相について、もう少し説明のほしいところである。

「もろこし」「からくに」「日本」「ひのもと」の論考も、周到な考証により、そのちがいがよく明らかにされている。その相異が何故生じたのかという問題を、作者の意識とからませ、たとえば前者は「一般的に用いられている『もろこし』を設定することがいわば『和』の世界であり、『からくに』に、中納言という限定された男性に関連する秘密の人物を背景に持たせる『漢』の世界を構築していたとみて、その二語を使い分けていたと考えられはしないだろうか」とする。後者については、「にほん」を对中国意識は明確な語、「ひのもと」を对中国意識は弱い語と明らかにしたのち、このような二元的な表現の使い分けを作者は意識しており、その意識は新しい内容の物語、宇津保物語や源氏物語などには見られなかった異郷の話素材に据えて構築してゆこうとする姿勢と深く関わるものだと論じている。なかなか興味ある見解である。小さなことばから出発して、構想という大きな課題に迫ろうとする著者の姿勢は見事でもある。しかし、一方でこれほど小さなことばにまで意を用いた浜松作者の構想意識は表現以外のところにも出ているのではないか、もっと直接的な形でも把え

ることが出来るのではないかとも思わせる。この書では語句を手掛りにした論考に限られているが、今後さらに対象を広げられることであろう。それを期待したい。

第三編からは、第一章「九百九十九人の王」の典拠を紹介しておきたい。物語中にある「九百九十九人の王」には典拠が予想されるところであったが、従来の研究では出典不詳とされてきていた。中西氏は三宝絵詞、宝物集に同趣の話を見い出され、仁王経・大智度論にその源泉があることを明らかにせられた。今日定説となっている。これは、たまたま出典を見つけたということではなく、氏の研究態度と精進がしからしめたと考えられるであろう。すでに述べたように、中西氏の研究方法は、用例を博搜して緻密に考証し、立論にあたっては、広く先見の業績をふまえてつづ、穏当な見解を導き出すとする態度が目立っている。地道な努力と調査が必要な態度である。また、後記によれば、氏は高等学校に在職中で、バレーボール部の顧問も務められ、少ない時間の中で研究を進めてこられたという。こうしたゆまぬ努力と向学心の結果が、「九百九十九人の王」の典拠となって実を結んだと思うのである。

以上第一編〜第三編を中心に紹介して来たのであるが、語彙・語句の考察が基本におかれているものが多く、本書の一特徴をなしているといえる。語句の考証そのものが優れた業績となっている場合もあるが、語句の用法から作者の意識を探ろうとする著者の意欲が強く出た論もある。本文上の語句をもとにして立論され

るのであるから、手堅い方法といえる反面、著者の目ざす課題は、作者の構想意識の追求という、語句のみではつつみ切れぬ課題であるから、考察の対象の広がり在今后に期待したいところである。また、『浜松中納言物語』を『源氏物語』の単なる模倣ではなく、新たな文学の創造であると位置づけておられるが、今回の書では構想を中心にとりあげられ、この点には深く触れられていない。文学史的な位置づけとも関わって、どのような見解を持たれるのか、興味をおぼえるところである。著者の今後の論文が期待される。

(昭和58年9月15日、大学堂書店刊。定価二一〇〇円)  
(ばん・としあき 本学教授)

本学の日文学専攻科も、構成する専任のメンバーが、ここ数年の間

にかなり変わってしまった。一昨年春、故鷹津義彦先生の後任として、芦谷信和先生がご着任になられ、近代文学の分野が、新しい展開を見せはじめて、一年後に、今度は森本修先生の後任として、昨年四月より、新たに上田博先生を迎え、更に

立命・日本文学の学風の樹立について  
松前 健

それから、水田潤先生が、昨年末、その御専攻の近世文学の御研究がみのり、文学博士の学位を取得されたことも、本学・本学会の地歩を、一層高める慶事として、会員一同喜びに堪えないところである。心からお祝いを申し上げたい。こうしたことから見ても、本学の日本文学専攻は、他大学よりまして、多士済々の陣容となった。それぞれの特色ある学殖と方法論をもって、教学に当り、また学界の大きな星となっている。

上田先生は、やはり近代専攻で、気鋭の学究であり、本学出身者で、会員の方々もよく熟知されているところである。

文学研究の方法はさまざまある。然しそのどれが正しく、どれが誤っているというようなものではない。それぞれが文学の本質解明と